

日本教育新聞

【2014年6月2日付】



教職員の成長が楽しみ
校内は常に笑顔や笑い声が絶え

チームとして学校組織を動かす。旗振り役は「校長の酸酐味」と話す永池校長



ない。コミニケーションを大切に、子どもたちの言葉の力を育んでいる横浜市立白幡小学校。学校全体の活力源となっているのが校長の永池隆子(58)だ。天賦爛漫で出会いを大切にしている性格の持ち主。教育活動を通じて、これまで出会ったさまざまな人と一緒に撮影した記念写真が校長室に並ぶ。

「天然校長」。世間知らずで、どこか抜けたところがある。そのため、教職員からそう呼ばれていることが多いという。しかし、謙虚な姿と「子どものために力を合わせたい!」という人並み外れた強い思いが、教職員だけでなく、保護者や地域の人など、多くの人の手助けや協力を引き寄せる原動力になっている。

管理職を目指すきっかけになったのは、ちょうど和歌を過ぎたころ、当時の勤務校の校長からの一声だった。「管理職は全く考えていなかった」という永池。しかし、人生の岐路に立たされたとき、「いろいろの立場を経験してみることは大切」と気持ち切り替え、副校長試験を受けた。校長をサポートする副校長職に就いた。事務処理などに扱われる忙しさ

の中、「『旅館の女将』のように多くの人に会えて楽しかった」と振り返る。

校長になって初めて着任したのが同校。本年度で7年目を迎える。楽しみみの一つは、教職員の成長過程を見ることができること。「授業が命」という教諭時代からの考え方に変わりはしない。良い授業をすれば子どもは変わり、教師もやりがいを感じる事ができるからである。

着任当初、校長室内には教材研究に関わる本などを集めた「リサーチコーナー」を設置。誰でも自由に出入りできるよう、常に校長室のドアは開けた状態のままにしてある。「リサーチコーナー」が校長と教職員をつなぐ一つの懸け橋となり、質問を受けながら共に授業づくりを築き上げてきたという。

退職まで残り1年半。さらに人材育成に力を入れていく。教務主任は副校長、副校長は校長など、「次の立場を意識させながら仕事を割り振ることが、校長としての腕の見せどころ」と永池。活躍の場を与え、きちんと周知し、褒めることで教職員の輝きも増していくという。

(敬称略、終わり)

永池校長先生の取組が、日本教育新聞に掲載されました。